

# 理論と実践のはざまにおかれた文学作品

—モーパッサンの幻想小説をよむための試論—

泉谷安規

## はじめに

古来、歴史上では、実際には遭遇するはずのない人物たちが、あたかも偶然（あるいは必然的に）出会ったかのごとく語り伝えられ、親しいあるいは熱烈な対話を交わし、お互いの思想ないしは意見を交錯させることで、それが後世に甚大なる影響を及ぼしていったというようなエピソードが数多く存在する。いわば歴史的な神話形成の典型と呼べるものであろうが、その例の一つが、19世紀の末期、パリにおいて展開されている。登場人物の一人は、モーパッサン（1850-93）、そしてもう一人の人物はフロイト（1856-1939）である。片や、フランス自然主義文学の若き騎手として、スターとなり名声と富を手にしながらも、狂気という精神疾患に見舞われ、非業の最期を遂げた作家である。もう一方は、言うまでもなく、精神分析を発明し、20世紀の精神医学界や思想・文化に多大なる功績をもたらした人物である。

この二人は、精神医学という共通の場によって接近したのであったが、その機会を提供したのが、当時ヒステリーの大家としてサルペトリエール病院で講義をしていたシャルコー（CHARCOT, Jean-Martin, 1825-1893）であった。フロイトは、1885年から86年にかけてパリに留学し、シャルコーの下で学ぶことでその後の生涯を左右する決定的な影響を受けている。またモーパッサンも1884年から86年にかけてサルペトリエールへ足繁く通い（患者としてではなく、当時、フランス中の評判になっていた講義を見物するためである）、シャルコーの警咳に接している。時期的にはぴったりと重なるとはいえ、この二人が実際に出会い、親しく会話を交わしたという可能性は限りなくゼロに近いということだが、晩年、その遺伝的資質と病のゆえか数多くの幻想小説を残して死んだ狂気の作家、そしてその後、精神分析理論によって精神医学界を大きく変えていった医者との架空の出会い、いたく人々の想像を掻き立てるようで、何人かの研究者たちはその著書のなかでこうした演出をしている<sup>1)</sup>。

## I. 催眠術に関する小史

さて、この二人の出会いを可能にしたかもしれない中心的人物シャルコーは、サルペトリエール病院において、当時の代表的な精神疾患であったヒステリーに対して「催眠術 hypnotisme」が有

効であることを、その華麗なパフォーマンスとともに広く人々に知らしめていた。ところで、そもそもこの「催眠術」であるが、その有効性及び医学的・科学的実効性については後述するとしても、元を正すなら、18世紀の後半、ウィーン大学出身の開業医師フランツ＝アントン・メスメル（MESMER, Franz-Anton, 1734-1815）が偶然に発見して、治療行為に活用したものであった。メスメルは、宇宙や世界が目に見えない微細な流体（*fluide*）からなるという、いわゆる「流体説」を唱え、それが生物や人体に影響を及ぼして病気などを併発させると信じていた。メスメルは、この流体を「動物磁気 *magnétisme animal*」と名づけていたが、これは後にイギリスの医師ブレイド（BRAID, James, 1795?-1860）によって「催眠術 *hypnotisme*」と名称を変更され、現在に至っている。メスメルのこの「動物磁気」による治療は、神経症やヒステリーと見られる疾患に一定の効果を挙げていたとはいえ、当時の大学医学部や医学アカデミーからは、道徳上・風紀上危険な治療法であると判断され（特に、女性の手や身体に触れることで磁気を送りこむと称したり、あるいは逆に女性のほうから治療者に「転移 *transfert*」を誘発しやすく、それを悪用するものが後を絶えなかったため）、メスメル自身は、自分の発見の真の価値を享受することなく、終生不遇の生涯を送らざるをえなかった<sup>2)</sup>。

こうして、メスメルの「動物磁気」は、正統的な科学・医学の領域から除外され、何人かのアカデミーとは無縁の在野の弟子（「磁気療法師 *magnétiseurs*」と呼ばれた人）たちによって細々と受け継がれながらも、歴史の闇に葬られるかに見えた<sup>3)</sup>。しかし、その運命を変えたのが、先述のシャルコーである。シャルコーは、はじめサルペトリエールで神経学の研究に没頭していたが、1870年からヒステリーに関心を寄せ、ヒステリー症状の系統的な臨床目録の作成に着手した。ここで一言付け加えておこなら、当時、「二大神経症」と呼ばれていたヒステリーとてんかんは、臨床面から見て、「器質的病変の欠如と全身痙攣」という共通の特徴をもつがゆえに、これは精神病医（*aliénistes* あるいは現在の呼称では *psychiatrists*）が扱うものでなく神経科医（*neurologues*）の領域のものとされた<sup>4)</sup>。ヒステリーとてんかんは、精神病医たちから敬遠され、遠ざけられていたのである。シャルコーが作成した「大ヒステリー *la grande hystérie*」の臨床的目録は、そうしたヒステリーとてんかんの症状を科学的・医学的に分類し、精神病の領域に戻す役割を果たしたわけである。再びトリアの言葉を借りるなら、「臨床解剖学的方法にゆだねることで、ヒステリーは他の病気と同じ一つの病気になった。すなわち、それは科学のなかにはいった<sup>5)</sup>」。

こうして、シャルコーによるヒステリーの臨床解剖学的目録は形成され、それによってヒステリーは公的に科学・精神医学のディスクール内に参入することが可能となり、一部の目的は達せられた。しかし、もうひとつの重要な仕事が残されていた。それがヒステリーを実証する「実験・実践」である。そしてその実験・実践の際に注目されることになるのが、「動物磁気」すなわち「催眠術」であった。はじめは催眠術に対して懐疑的であったシャルコーではあったが、それがヒステリー患者の発作を自由自在に操ることができること、あるいはもっと正確に言うなら、催眠がヒステリー症状を忠実に再現することにシャルコーは気づいたのである。いわば催眠は、ヒステリーと

いう、謎めいていてきわめて厄介な病の本質を明らかにしてくれる道具と映ったのである。トリアはこう言っている、「さらにシャルコーは、催眠によって空白を埋めることが可能になったし、またこの欠けている面、すなわちヒステリーの病原論 (pathogénie) という面を組み立てることが可能になった。催眠はヒステリーにとっては、病変のある神経学的障害にとって解剖学的部分に当たるものになるだろう。そのとき、研究はその二つの面、すなわち臨床と病原という面で、完成するだろう。催眠現象によって、ヒステリーの本質とはなにかということが発見できるだろう<sup>6)</sup>。」ここから、多くの名士(そのなかにはフロイトやモーパッサンも含まれる)を魅惑した、ヒステリー患者を登場させる、シャルコーの公開講義(金曜講義)が由来する。この有名な公開講義は、プーイエによる油彩画に描かれイメージ的にも周知のものとなっているが、シャルコーの物々しくも毅然とした講義態度、またヒステリー患者の驚くべき反応、多数集まった聴講者の熱意などによって、さながらスペクタクル観劇のごとくであったという。この実験・パフォーマンスにおいて、ヒステリーの女性患者の被験者が示す反応は、主に「大催眠 le grand hypnotisme」と呼ばれ、「カタレプシー la catalepsie」、「嗜眠 le léthargie」、「夢遊状態 le somnambulisme」の三様の連続した段階をとったという<sup>7)</sup>。こうして、シャルコーによるヒステリー疾患解明のための方法の一つとして、メスマルの提唱した「動物磁気＝催眠術」は見事復活を遂げるのであるが、100年もの長きにわたって蔑まれ無視されていたメスマリズムが、1882年、ついに科学アカデミーの殿堂入りを果たすこととなるというのは大きな変化であるとして受け止めなければならないだろう。

以上が、ヒステリーという疾患を介した、「催眠術」によるシャルコーの偉大な発見であるとともに、またそれがその限界そのものでもあった。というのも、このシャルコーの理論に対して、同じく「催眠術」に注目したナンシー学派が公然と反論をつきつけてきたからである。このナンシー学派は、地方の平凡な開業医であったオーギュスト＝アンブローズ・リエポー (LIEBAULT, Auguste-Anboise, 1823-1904) が近隣の患者に催眠療法を実施して効果を上げたのにはじまるのだが、ナンシー大学医学部教授のイポリット・ベルネーム (BERNHEIME, Hippolyte, 1840-1919) がその治療方法に注目して理論付けを行ったものである。ただし、その際ベルネームは、シャルコーと異なり、催眠術がヒステリーの病原解明に役立つものとは考えていなかった。この二学派の争点を簡単にまとめると、以下ようになる。先に述べたように、シャルコーは、催眠をヒステリー患者だけに特有の効果を及ぼすもの、すなわちヒステリーの解剖学的側面を補完するものと考えていたが、それに反して、ベルネームは、催眠を純粹に心因的な「自己暗示 la suggestion」であるにとらえ、そう主張していた。簡単に言うなら、ヒステリー患者でなくとも催眠は誰にでもかかるというのがその主旨である。

この論争の趨勢は、一方の主役のシャルコーの生前から、結果は半ば明らかであった。ナンシー学派の唱えた暗示は、サルベトリエール学派の研究成果である催眠術＝ヒステリー論という理論構築を瓦解するのに十分な主張であった。実際に、サルベトリエール学派に属し、将来を託されたシャルコーの弟子でもあったピエール・ジャネ (JANET, Pierre, 1859-1947) も、最初は師の教え

に忠実であったが、やがてその方法論上の過ちを認めるようになる。「大ヒステリー」や「大催眠」といったシャルコーの臨床解剖学的な記述は、その整合性や一貫性を保とうとするあまり、牽強付会すぎて恣意的なところが目立ち、ヒステリー症例の個別的な例外や亜流に対応できないところがあった。また、先述の有名な公開講義にしても、被験者であるヒステリー女性患者が、なかば意図的にシャルコー教授の意に沿うような態度振る舞いをしていた節があるといった、サルペトリエール病院に蔓延していた状況的かつ環境的状况もある。さらには、留学時の教えによって人生を決定され、生涯シャルコーに敬愛を忘れなかったフロイトですら、自身の精神分析理論の構築にあつては、催眠に関しては、師の理論より、反サルペトリエール学派の代表格であるベルネームの教えを請うていたという事実がある。

こうして19世紀後半の精神医学会を揺るがした論争にあっけない終止符が打たれたとはいえ、シャルコーが残した研究成果をないがしろにできないことも厳然たる事実である。多発性硬化症、筋萎縮性側索硬化症（シャルコー氏病）、運動失調症とこの失調症に特有の関節症（シャルコー関節）などの今日でも医学において認知されている発見、ヒステリー領域においての、ヒステリー麻痺、外傷後麻痺、催眠性麻痺を力動的麻痺群（*paralyses dynamiques*）として、神経損傷の結果由来する器質的麻痺に対立する位置に置いたこと（このことはフロイトの力動的精神医学、すなわち精神分析の先鞭をつけたのに等しいとも言えるだろう）、そして「催眠術」すなわちメスメリズムを科学的・医学的ディスクリールに公式に受容させた功績は忘れてはいけぬのではないだろうか<sup>8)</sup>。そしてとりわけ、その魅惑的かつ刺激的な公開講義に引寄せられたことで、あるいは邂逅を果たしたかもしれない二人の歴史的人物の出会いのトポスを提供したかもしれないことによって。

## Ⅱ. モーパッサンの幻想小説と「動物磁気 *magnétisme*」

### Ⅱ-1. モーパッサンの態度

では、モーパッサン自身は、「動物磁気 *magnétisme*」をどのようにみなし、どのような反応を示していたのであろうか。先述したように、モーパッサンは1884年以来、シャルコーの講義を聴講しているが、それ以前にもこの高名な医師の名前と理論を知っていたのは確実である。それを証しするのが、彼が残した二つのテキストである。一つは、幻想的短編小説で、タイトルは、そのものずばり「動物磁気 *magnétisme*」、後の一つは「女性 *une femme*」と題された時評（*chronique*）で、どちらも1882年に『ジル・ブラース *Gil Blas*』誌に発表されている。この二つのテキストのなかで、モーパッサンは、ヒステリーとシャルコーの理論を思う存分こき下ろしている。例えば、時評「女性」にはこういった激しい文章が見られる。「シャルコー博士、このヒステリーの偉大なる司祭、このヒステリー患者の室内飼育者は、多大の費用を費やして、サルペトリエールというモデル施設において大勢の神経症女性患者を養っているのだが、博士は彼女たちに狂気を植え付け、彼女たちをあっという間に悪魔憑きにしてしまう。<sup>9)</sup>」モーパッサンはここで自然主義文学の作家として、シャルコーとヒステリーのなかに、中世的なアナクロニズム、あるいはある種の神秘主義を嗅ぎ取って、

それに対抗して人間の理性と合理主義を代表する立場を貫いているように思われる。多かれ少なかれこういった見方は当時の人々の意見や印象を反映したものと見ることができよう。1813年の制度改革によって、それまで貧民救済の病院であったサルベトリエールが、女性専用の精神神経疾患患者の施設になったことがその歴史的背景にあるのだが、外部から詳しくうかがい知ることのできない施設の閉鎖性と非日常性がこうした大衆的幻想と偏見を生み出したものとみえる。

## II-2. 「動物磁気」

では、以下に、同年に発表されたもう一つのテキスト（こちらは純然たるフィクションであるが）「動物磁気 *magnétisme*」を見てみよう。この物語は、人々が集まったある夕食会の後で、会話が今話題の「動物磁気、ドナートの奇術とシャルコー博士の実験<sup>10)</sup>」(I. p.406)へ及んでいくところからはじまる。会食者の大多数の人々は、若干の留保を示しながらも、「動物磁気」やそれに類する超常現象の存在を否定しきれないでいる。奇妙なことに、彼らにとっては、科学という合理主義によって裏打ちされた催眠術という先進的な成果は、今世紀末に残された宗教的な「不可思議なものの最後の残滓」(I. 406)と映っているのである。そんななかで一人の若者、「頑健な若者、少女をひたすら追い求め人妻を漁色し、一切の無信仰」(*Ibid.*)を標榜する人物が反論を加えてくる。主人公のこの若者にとって、単なる奇術師のドナートは言わずもがな、シャルコーとは、以下のような人物像となっている。

シャルコー氏に関して言うなら、卓抜なる学者であると言われていわれていますが、狂気の奇妙な症例についてあまりにも考えをめぐらせすぎたがゆえに、最後には自分自身狂人となってしまふような、エドガー・ポーの類の物語作者といった印象を私は受けますね。( *Ibid.* )

この後、会席者の一人一人がそれぞれ、さまざまな奇妙な体験や現象を披露するのだが、そのたびにこの若者は、「そんなのは、でまかせ、でまかせ、でまかせです！」(I. p.406-407)という口癖を繰り返し、かたくなな態度を崩さない。それなら、と一同は、彼に対して、彼が体験した、あるいは聞き及んだ不思議な現象を披露してくれるように詰め寄るのだが、それに対してこの若者は、「動物磁気」に関係すると思われる二つのエピソードを語りだす。

その一つが、エトルタの小さな漁村に起こった出来事である。この村の住民はほとんどが漁師であり、毎年、鱈漁のために、はるばるカナダのニューファンドランドの漁場まででかけていく。ところで、そうした漁師のこどもの一人が、ある夜、夢遊状態で飛び起きて、「お父ちゃんが海で死んだ」とか「お父ちゃんが溺れた」と叫びだしたというのである。実際、一ヵ月後、その子供の父親は波にさらわれ、海に落ちて死亡していたことが判明した。人々は驚き、日付を照合してみたが、その結果、「その事故と夢がほぼ一致することが分かった。そこから、これらの二つが同じ夜、同じ時刻に起こったものと結論づけられた。これが、動物磁気的神秘というわけです。」(I. p.407)

この不可思議な事件について、主人公の若者は、断固として、動物磁気による神秘主義的解釈、予言であるとか予知夢を退けている。そしてこの若者は、綿密な調査を行い、考えに考えを重ねた結果こう結論を下す。それが、以下のものである。村民のほとんどが遠洋漁業で生計を立てているこの村の住民にとっては、夫あるいは父親の不在は日常茶飯事のことであり、かつ、その仕事柄危険を伴うのはいたしかたない。この死者をだした事件の当事者の家族以外にも、村の何人あるいは何十人も家族、妻や子供たちにとっても、過酷な仕事に従事している父親の安否を、常日頃、慮って心休む暇がないのは当然である。そこで、若者はこう結論を下す。父親たる漁師の安否を気遣って、不安や恐怖に駆られ、夢遊病や強迫観念にとられる人はあまたあるが、今回の事件は、たまたまそうした不安や恐怖と死亡事故の時期が一致したのだと。ましてや、この事故が死者を生み出したという最大の不幸が、それ以外の、この村に蔓延していたほかの同様な不安や恐怖の個々の現象をかき消してしまう形となり、この死亡事故のみが浮き彫りにされ、いわば話に尾ひれがついて、当時話題になっていた「動物磁気」と結びつくことによって、神秘化・神格化されたのであると。

この第一のエピソードについては、動物磁気すなわち「魂同士のテレパシー的な交流」(I. p.407)という謬見を廃して、単なる偶然の一致ということで全き合理的・理性的な説明が通用するのであるが、若者の語ったもう一つのエピソードについては、そう簡単な解釈はできないようである。

さて、そのもう一つのエピソードであるが、これは話者の個人的生活にまつわるものとして、上述した第一のエピソードの不可思議な現象のように、すっきりとは解釈できないようである。

いきさつはこうである。舞台は社交界、この若者は、一人の若い貴婦人と出会うのであるが、この女性は若者のタイプではなく、彼女に興味を惹かれるところはひとつもなかった。しかしながら、ある晩、就寝前に手紙をしたためている最中に、この若者の心理に異常な変化が生じる。それはこう描写されている。

私は、いろいろなふしだらな想念、いくばくかの間に夢想にふけているときに脳をかすめるあのイメージの連なりに感覚を奪われ、持っていたペンを中に浮かせたまま、私の精神のなかを通過するかすかな息吹を感じた。それは、心臓の鼓動であったが、すぐさま、さしたる理由も、論理的思考の脈絡もなしに、私ははっきりと見たのだった (*J'ai vu*)、あたかも彼女に触れたかのごとくに見たのだった (*vu*)、その足先から頭まで、何一つ覆われるものもない、あの若い女性を見たのだ (*vu*)。彼女にはちょっとした時間も思いをめぐらすことがなかったが、そのわずかな時間だけでも彼女の名前が私の脳裏に刻まれたのだった。(I. p.409)

この瞬間は、主人公の若者に見向きもされなかったこの女性の側からの「動物磁気」の放射の間であろうが、このあと主人公は眠りにつくことになる。その眠りのなかでも彼は、突然自分の精神に闖入してきた女性に対する愛情の念を感じ、それは夢のなかで続けざまに「三度も」(*Ibid.*) 繰り返

返し現れ、若者の女性に対する情熱を掻き立てて止まなかった。目が覚めたあと、若者はすぐさまこの女性の許へと赴き、それ以来、この女性は2年間ものあいだ、若者の愛人となる。この現象について釈明を求められた若者は、躊躇いがちに、以下のような解釈を下す。

私がそこから結論を引き出したのは……私の結論は、もちろん、偶然の一致です。それに、誰が説明できますか？おそらく私が気づきもしなかった彼女の視線 (un regard d'elle) が、記憶のあの神秘的で無意識的 (inconscients) な想起の一つによって、その晩、私のもとに再びよみがえってきたのでしょうか。そうした想起は、しばしば私たちの意識 (conscience) によって看過され、私たちの知性の前を気づかれることなく通過していくものですから！ (I. p.410, 下線強調引用者)

若者のこうした歯切れの悪い釈明に対して、会食者の一人が、皮肉を込めてこう言葉を投げつけることによって、この物語は幕を閉じることになる。「そうしたことを経験されたあとで、あなたがなお動物磁気を信じていないとおっしゃるなら、あなたは恩知らずですぞ！」(Ibid.) この最後の人物の言葉からもわかるように、この物語は、動物磁気存在否定に対する留保つきで、動物磁気信憑性については曖昧さを残したまま幕を閉じている。ところで、物語で披露されている二つの動物磁気に関するエピソードは、そもそも前提が異なっている。第一の、エトルタの漁民の遭難に関しては、それは主人公の若者と直接関係する現象ではなく、それゆえこの語り手は第三者の立場から、冷静かつ客観的な釈明(と思われるものを)を陳述することができた。それに対して、第二のエピソードは、若者の実体験に基づいており、語り手の身体的・感覚的領野に直接的に関わるものであった。そこから、この若者の第二のエピソードに対する曖昧な結論が由来しているのだが、ともあれここで、この物語に特徴的な三つの重要ポイントを整理してみたいと思う。

第一のポイントとして、第二のエピソードのなかで、モーパッサンが、その後、フロイトの精神分析のキーワードとなる「無意識 *inconscience*」なる語をすでに使用している点である。「無意識」という言葉は、なにもフロイトの発明や特許になる言葉ではなく、それ以前にも頻繁に使用されていた言葉であるが、それが「動物磁気」という異常心理学を表象するさいに使われていたことは、やはり注目に値するであろう。ここにおいても、フロイトとモーパッサンとをつなぐ運命とも言うべき糸の一端が見られるであろう。第二のポイントとして、「動物磁気」の主人公の若者が、後の愛人になる女性に対する愛情と情熱を、「夢 *le rêve*」のなかで反芻し強化している点である。周知のように、フロイトの夢理論の集大成である『夢判断(夢解釈) *Die Traumdeutung*』が出版されたのは、1900年のことである。「夢は無意識に至る王道である」、あるいは「夢は(無意識における)願望充足である」といったテーゼを基盤にして書かれた、このフロイトの画期的な著作を、1893年に亡くなったモーパッサンが読んだという可能性は皆無だが、作家特有の勘と夢に関する伝統的な知恵(「夢は真実を告げる」といったような)によって、作品のなかで巧みに利用しているのであろう。

第三のポイントとして、フロイトの精神分析の話から外れるが、モーパッサンは、本来見えない存在である超常現象を、しきりに「見た voir/ vu」と視覚化して強調している点である。先の「動物磁気」においても、自分の寝室に存在するはずのない女性を、「足のつま先から頭まで」、「見た」という記述がある。本来目に見えない存在や対象を、「見た voir/vu」とする表現は、モーパッサンの他の短編にも繰り返し現れており、いわばモーパッサンの強迫観念を形成している観があるが、これも後に論ずる「オルラ」においても物語り上重要な伏線となっている点において、やはり見過ごせないモチーフであろう。そして、「見ること/見られること」といったこうした、視覚にまつわる能動的/受動的行為は、「動物磁気」の操作と密接に関連している。なぜなら、動物磁気あるいは催眠術を操る催眠術師は、主に、見つめること、視線によって相手に術や暗示をかけるのが常套手段であるからである<sup>11)</sup>。先の「動物磁気」における主人公が、まず愛人の「視線」を感じ（視覚の受動的作用）、それによって見えない姿が見えた（視覚の能動的作用）、とする証言は、この女性が立派な磁気暗示能力を備えた人物であることを示すものであろう。

### Ⅲ. 「オルラ Le Horla」を読む

#### Ⅲ-1. 「オルラ」をとりまく諸状況

次に、「オルラ」というテキストを見ていきたい。このテキストは、数あるモーパッサンの幻想的物語のなかでも特権的な位置を占めている作品である。まず、最初に、この作品は、ある恐怖体験により、主人公が狂気の世界に落ち込んでいく過程を描いたものであり、その題材が、当時、精神の不調に悩まされていたモーパッサン自身の実体験から汲み取られているとみなされているがゆえに。第二に、この作品には二つのヴァージョンが存在し、その二つを比較検討することによって、モーパッサンの作品の創作過程の経過が浮き彫りになってくるためである。そして最後に、オルラという未知の存在を証明するために、本論の主題である動物磁気と催眠術が利用されているがためである。

まず、「オルラ」であるが、ルーアンの近郊、セーヌ河沿いに住むある男が体験した物語という設定になっている。財産にも健康にも恵まれて何不自由ない生活を送っていたこの男は、ある日を境にして、次々と異常な恐怖体験に見舞われることとなる。まず原因のわからない神経の不調と不眠症に苛まれたのがそのではじめである。そして、夜、眠っている最中に何者かによって口中から生気を奪われるような感覚を覚え、実際に身体もやせ衰えていく。夜中に自分で飲んだ覚えがない枕もとの水やミルクが朝には空っぽになっていたり、また、真昼間、家の庭でまるで目に見えない誰かがやっているかのようにバラの花が手折られるのを目撃する。かと思うと夜中、書斎の自分の机で、目に見えない誰かが本のページを繰っているのを目にする。そして極めつけは、自分の姿を鏡に映そうとするが、まるで鏡と自分との間に何か他の存在がいて像をさえぎっているかのように、自分の姿を鏡に映して見るができない。以上のような不思議な出来事に遭遇した主人公は、自分が精神の異常による「幻覚」を見ているのか、それとも、実際に「目に見えない存在」がいて自分

はそれに襲われているのかと考える。そして彼はこの存在を「オルラ」と命名するのである。

こうした恐怖、妄想、あるいは正体不明の他者の迫害打撃を受けた主人公は、二つの防御策を講じることになる。一つは、そのまま精神病院へ直行してその庇護を受けること。もう一つは、この恐怖の存在に真っ向から直面し、それに最後までとことん対決することである。と、こう書いてくると、同じ一つの物語の主人公が異なった二つの解決法を同時に選択したかに思われて混乱を招く恐れがあるので、すぐさま修正を付け加えなければならないが、この結論は別の二つのテキストの結末であり、作品「オルラ」には二つの異稿があり、それがこうした異なる二つの結末に反映されている。すなわち、モーパッサンは、同じタイトル、同じ題材で、「オルラ」なる物語を書いているのである<sup>12)</sup>。同じタイトル、同じ主題で、一年もたたないうちに二つの作品を書いていることから、モーパッサンのこのテーマ（恐怖、妄想、他なる存在）に対する執着心のほどをうかがい知ることができるが、他方でこうした創作経過による複雑性や混乱によって、爾来、この「オルラ」というテキストは、さまざまな議論を可能にしてきた。それらをまとめてみると、以下ようになる、1)「オルラ」を書く題材を提供したモーパッサン自身の精神的疾患と作品との関係はどのようなものであったのか。周知のように、モーパッサンは、若いころ罹患した梅毒による進行性麻痺によってその命を落としている。2) 同じタイトル、同じ主題で書かれた「オルラ」という二つの作品の関連性はいかなるものであったのか。3) そして最後に、作品「オルラ」におけるメスメリズム＝催眠術は、いかなる機能を果たしていたのか。

### Ⅲ-2. 精神病理学と文学実践

まず、第一の点について検討してきたい。モーパッサンの病歴とその作品との関連性を丹念にたどった労作である寺田氏の論考によると<sup>13)</sup>、19世紀当時不治の病であった梅毒にモーパッサンが罹患したのは、1876年の26歳の頃と推察されるらしい。「オルラ」執筆まで9年、1880年の『メダンの夕べ』で『脂肪の塊』を発表して華々しい作家デビューを果たす4年前である。以来、モーパッサンは、神経障害、胃腸不良、眼疾等々の病に悩まされ続けながらも、『女の一生』(1883)、『ベラミ』(1885)、『モンリオール』(1887)の長編小説やその他の短編を矢継ぎ早に出版し、流行作家としての地歩を確実に固めつつあった。

そして問題の、「オルラ」執筆の1886年—1887年であるが、彼の健康状態は、宿痼の梅毒の影響により、最悪の状況にあったようである。再び寺田氏の表現を借りるならば、この頃のモーパッサンの梅毒性進行状況は「第三期の状況に入ったとみえる。第三期は感染後三年を経過してからで、主要な症候は皮膚疾患のゴム腫や内臓の疾患、それから一〇年たった頃から発症を見る脳・神経障害<sup>14)</sup>」とのことである。しかしながら、このような身体的・精神的障害に見舞われながら、その実体験を、単に一患者の臨床報告として綴っていくのと、それを作家として小説作品という形に結晶させていくのとは、まったく別物であろう。事実、二つの「オルラ」という作品は、病者の体験記や闘病記とは異なり、われわれが今日でも読むにたえる文学作品たる資質を備えていることは、異論のな

い事実であろう。実際、そこには比類のない構成力、文体、表現法が見事に展開され、それらを読むわれわれに感動を与えてやむことがない。また、作者のモーパッサン自身も、「オルラ」連作の執筆に当たっては、健康上の影響はまったく関与していないという証言を残しているという<sup>15)</sup>。だがまたその一方では、この「オルラ」という作品が書かれるにあたっては、モーパッサン自身の病歴体験が不可欠であることもまた事実であろう。いくら医学的知識を有していても、またその種の患者をどれほど観察してみても、あまつさえサルペトリエールでシャルコーの講義に出席して最先端の知識に接していようが、そうした〈外部から〉得られただけの事実の集積——あえてここではそれらの知識の集合体を〈理論〉と名づけよう——だけではあれほどの迫真性の高い作品は完成されなかったであろう。「オルラ」が書かれるためには、モーパッサン自身の梅毒罹患が、モーパッサン自身の幻覚、妄想、分身体験が、そうした〈内部から〉もたらされる要因もまた必要であったこともまた否認めない。だが、精神病を内に抱えた作家にとっては、ここでは、そうした〈内部〉のものとは、通常人の単なる記憶や体験にとどまらない。なぜなら精神病を通して現れる心像すなわち、幻覚、妄想、分身といったものは、ここでは自己の内部の〈他者〉とでもいうべき存在に変貌しているからである。そうした意味においては、作家はここでは、語の二重の意味において《aliéné 精神病患者=自己疎外された》存在であるといえるだろう。そして、モーパッサンはそれを十分すぎるほど自覚していたに違いない。いかにしてこうした境遇を維持しつつ、それを作品創造へと橋渡ししていったのか。いかにして作家は、これら二重三重に拮抗する要因を抱えつつ、それをテキストという統一体に仕上げたのか？すなわち、ア・プリオリに「aliéné =精神病患者」（ここでは本来的に抱えている、内部的な精神疾患の症候）である自己の存在を「aliénation=自己疎外化、譲渡」することにより、そこから得られた第二の「aliéné」（自己疎外化や譲渡による、いわば客観化・外部化された精神病であり、これには幻覚や妄想といった、物語において言説化可能な症候が含まれる）に基づいて「aliénation =精神病」についてのディスクールを形成していく（周知のように、このプロセスにおける、第一の「aliéné」は、その本質上、個人の体験や記憶に限定されるがゆえに、共感あるいは共有されたいものの最たるものであろう）。まとめるなら、「オルラ」は狂気によって書かれた作品ではなく、狂気に基づき、狂気に突き動かされて、狂気を書いた作品、であるといえよう。こうした幾重にも輻輳した創作過程を経て生み出されてきた作品「オルラ」。以上がこの作品「オルラ」の迫真性や完成度の高さを保っている要因である。われわれがこの作品を特権的と呼ぶのはまさにそうした理由によるのである。

### Ⅲ—3. 二つの「オルラ」

さて、先に述べたように、「オルラ」という作品には二つの異稿が存在している<sup>16)</sup>。この二つの異稿の間には、テーマやモチーフといった内容上の大きな異同は見られないが、ただし形式が著しく異なることが大きな違いといえよう。すなわち、初稿「オルラ」は、不可視の生物オルラの度重なる襲撃にたえかねた主人公が、精神病院へ庇護を求め、後になってからその異常体験を物語るという

形式になっている。それに対して第二の新版「オルラ」は、主人公＝語り手の日記形式で物語が進められるという変更が加えられている。同じ殺戮者による脅威、同じようなエピソードの繰り返しとはいえ、形式上の変更による、二つのテキストの印象と結末はまったく違ったものとなっている。

まず、初稿「オルラ」では、精神病院の入院患者が、自分の経験した異常な体験を、他者に語り聞かせる、いわゆる「額縁小説」となっている点が特徴といえよう。そのさいに傍聴人となるのは、語り手「私」（何者かは不明）と、主治医のマランド博士（これは、一説には、シャルコーをモデルにしているといわれる）、そして三名の精神科医と四名の科学者である。これらのお歴々を前にして、患者は、自分の体験した異常な体験を淡々とした調子で披露する。自分はいかにして、今まで目に見えない存在のオルラなるものによって迫害をうけてきたのか、それはこの章の冒頭に述べたエピソードと同様であるが、注目すべきは、この人物は先の鏡のエピソードの恐怖体験をしたことにより、自分が狂人であるという冷静な判断を下し、精神病院へ避難するという安全措置をとっていることである。確かに、この男の語る内容は異常な出来事であり、現実にも起こるべくもない性格のものである。しかしながら、先にも述べたように、物語のなかでそれを語る男の口調は正確かつ理路整然としたものであり、そこには狂気による語りの破綻がない。こうした語られる内容と語り方のズレが、初稿「オルラ」の最大の特徴である。そこから、R. ボゼットのような研究者が、二つの作品「オルラ」をまったく別の作品であるとする根拠を読み取っている<sup>17)</sup>。ボゼットによれば、初稿「オルラ」の意図と目的は、最初から、オルラという未知の存在を証明することにあるという。そのため、この物語には作者によっていくつかの客観的証拠が用意周到に配置されている。まずは、この作品が、物語のなかにもう一つの物語を包摂する、いわゆる額縁的な形式をとっていることである。第一の語り手による物語が、第二の（狂人とされる男の語る）物語の信憑性を保証する枠の役割を果たしているのである。ボゼットによれば、幽霊、超常現象、未知の存在を出現させる、これは古典的な幻想小説の典型的タイプであり、「幽霊」（1883）や「狼」（1882）といった作品にこの手法が見られるという<sup>18)</sup>。それに対して、「あいつか？」（1883）や「髪」（1884）などの作品では、この枠がはずされていき、語り手は、読者に向かって直接語りかけることになるのだが、モーパッサンにあってはこの物語手法の形式の変更は、狂気に対する作者の興味の度合いの深さに関連しているという。

ここで再び話を初稿「オルラ」に戻すなら、これは前者のタイプに分類される作品であることはいうまでもない。病院に入院した患者は、みんなを前にして、開口一番こう念を押している。

「[マランド]先生は長い間、私を狂人だと思っておられた。が、今では、自信を失っておられる。みなさん方ももう少しするときと、私の頭がみなさんの頭と同じように、健康で、明晰で、しっかりしていることを認められるはずです。そうでない方が、私にとって、みなさんにとって、全人類にとっていいのですが。（Ⅱ .p.822）」

こうした意味深長な言葉を述べた後でこの男は、自分の体験したことを語るのであるが、話が終わった後で、そうした異常な体験がすべて本当にあった出来事であり、そのことはマランド先生自身が確認をとった疑いのない事実であることが判明する。すなわち、オルラという存在は（どうやら）実在するのであり、被害者は他にもいて、オルラがどこからやってきたかを証拠立てる新聞記事も紹介されている。オルラが今まで人々に見つからなかった理由は、それが人間の認識能力や感覚の及ばない、超自然的存在であったためであり、あるいはオルラは世界の人間支配に終止符を打つためにやってきた侵入者、人類の後継者たる存在なのかもしれない<sup>19)</sup>。そして、物語中で触れられている最近流行の「催眠術、暗示、動物磁気」(I. p.830)は、そうした目に見えないオルラを科学的に証明する道具立てに過ぎないものとして、軽い言及にとどまっている。最後にマランド博士はこう慨嘆している。

「私にも付け加えることはない。この男が狂人なのか、それとも私も彼も狂人なのか……それとも……人類の後継者がほんとにやって来たのか……私には解らん」(Ibid.)

こうして、初稿「オルラ」は、幻想小説でありながら、そこでは一切が明晰で判明で、読後にいささかの疑念やためらいも残すところはない。また、そこで使用されている水や鏡のエピソードも、オルラの存在を立証するために利用されたものでしかない。ポゼットはこう述べている、「こうしたすべての要素は、あるいは妄想のシナリオ、あるいは理論として読まれうるものの枠のなかにはめ込まれている<sup>20)</sup>。」いわば、初稿「オルラ」は、結論を先に設定してそこへ収斂していくように構築された物語、あるいは「理論」に沿って忠実に描かれた物語であるといえよう。こうした意味では、この作品は、幻想小説というよりは、SF小説に近いかもしれない。

次に新版「オルラ」であるが、同じタイトル、同じテーマを扱いながらも、先述のように、形式が日記に改められたことにより、その印象は一変する。語り手のより深い内面性がテキストに表され、それによってある一つの主題がはっきりと浮かび上がってくる。それが「狂気」の問題である。初稿「オルラ」で確認したことだが、そもそもこちらの語り手は「狂人」であったかどうかとも疑わしく（もしそうであるなら、オルラは存在しなかったことになり、物語の前提そのものが崩れてしまうだろう）、彼の恐怖の対象は最終的には特定可能な存在であった。語り手が恐れていたのは、オルラという未知ではあったが、やがて正体の知れる存在であり、いかに恐ろしい化け物であろうとも、それは〈外部〉からやってくる。すなわち〈外部〉から到来し取り付こうとするものに対しては、結局は戦いに敗れ去るかもしれないが、それなりに心構えをたて予防策を講じることは可能である。しかしながらそれとは対照的に、新版「オルラ」では、語り手が恐怖するものの正体は結局わからずじまいである。実在する未知の生物オルラなのか、それともそれは単なる幻覚・妄想なのか。テキストは最後までそれを明かすことはない。ともあれ、ここではそのなにものが〈内部〉からやっ

てきて徐々に語り手を蝕むことは確かなようである。五月八日から九月十日にかけてつづられた日記、そしてそこに記されている語り手の心のさまざまな動き（不安、絶望、希望、安堵）がそれを示している。とすると、〈内部〉からやってくる脅威に対しては逃げ道はなく、状況はさらに過酷である。ましてやそれが、「狂気」なる、正体不明のもの、永遠に名づけえぬものであった場合にはなおさらであろう。そうしたジレンマが初稿「オルラ」にはなかった悲惨な結末を導き出している。主人公は、完全な錯乱状態に陥り、オルラを亡き者とするために自分の家に火をつけて、家人もろとも焼き殺してしまうのである。テキストの最後が述べているように、それが成功したかどうかは別として。

ともあれ、ここでは、二つの重要な点に絞って論じてみたいと思う。というのも、初稿「オルラ」では数々のエピソードは、最後の一点、すなわちオルラが存在を証明するためだけに配置された付属品で、いささか相互の有機的連関性を欠いているように思われるからだ。それに対して新版「オルラ」では、以下の二つのエピソードは物語の進行と展開を左右する必要不可欠な場面となっている。それが物語り中間にでてくる催眠術に関するエピソードと最後の鏡のエピソードである。

まず、催眠術のエピソードであるが、不思議な現象に見舞われた主人公は心身ともに疲労の極みにあり、気分を変えようとパリへ出かける。最初はこの転地は完全に効果をあげるかに思われた。七月十二日の日記の記述にはこうある。「パリ。このごろ、私はやっぱり正気を失っていたのだ！本物の夢遊病者でないとしても、神経衰弱的な妄想に玩弄されていたのに違いないのだ。それとも、認められていながら、今日まで説明がつかなかった、あの影響力、暗示と呼ばれるものに支配されていたのかもしれない。とにかく、私の狂態は精神錯乱に近いものだったが、パリですごした二十四時間は、私を正気に復せしめるのに十分であった。」（I. p.921）しかしながら、それから四日後の、七月十六日主人公の運命を変える日がやってくる。この日、主人公は従妹のサブレー夫人の晩餐会へ呼ばれ、そこで「神経系統の疾病が専門で、近來、催眠術や暗示に関する実験から生ずる異常な現象を研究して」いて、「ナンシー学派」（I. p.922）の研究成果に詳しいパラン博士と出会う。語り手は、催眠術や暗示に関してどうしても信じられないと主張したため、こうした答えが返ってくる。

すると、彼 [=パラン博士] は確信するのだった。「いまや、われわれは自然界における最も重要な秘密の一つを発見しようとしているのです。と申しますのは、地球上における自然界のもっとも重大な秘密という意味なのです（……）人間が考えるようになって以来、そして、その考えを口で言い、文字に書くようになって以来、人間は自分の粗雑で不完全な五官ばかりではかり知れることのできぬ、ある神秘に触れているのを感じます。そこで彼は、おのれの器官の無力を、知識の働きで補うことを努力します。ところで、その知識がまだなお初歩の状態にとどまっているあいだには、この目に見えぬ現象との交通は、通俗的な恐怖の形式をとったのでした。こうして、超自然にたいする習俗の信仰、すなわち精霊や、妖精や、地神や、幽霊などの伝統が生まれたのであります。（……）ところが、ここ一世紀ばかり前から、人々は、新しい、

ある何者かを予感しているかに見えます。メスメル、このほか、二、三の学者は、われわれを思いがけない道に導いたのであります。そして、じつにわれわれは、とくにこの四、五年來、驚くべき結果に到達したのであります。(Ⅱ. pp.922-923)

他の論考でも論じたが<sup>s21)</sup>、ここでは一世紀來、忘却のうちにあったメスメリズム、催眠術が医学界において復活を遂げた歴史的瞬間が描かれている。と同時に、人間の認識能力の限界と感覚の不確かさが確認されることで、それを超えた次元にある世界や生物の存在、すなわちここではオルラが示唆されている。この点は、初稿「オルラ」と共通するテーマである。だが、問題はその先にある。パラン博士のこの説を一笑に付した従妹は、実際、催眠術をかけられてしまうのである。その場面はこうある。

「お従妹さんのうしろにいてください」医者が言った。

で、私は彼女のうしろに腰かけた。医者は従妹の手に一枚の名刺を持たせ、「これは鏡ですよ。このなかに何がお見えになりますか?」と言った。

彼女は答えた。

「従兄が見えます」

「彼は何をしていますか?」

「ひげをひねっています」

「ではただいまは?」

「ポケットから写真を出しています」

「どなたの写真ですか」

「ご自分のです」

まったくそのとおりだった!この写真というのは、その日の夕方、ホテルで受け取ったばかりのものだった。

「ではどういうふうに写っています?」

「手に帽子を持って、立っています」

してみると、彼女には、まるで鏡のなかでも見ているように、この名刺のなかが、この一片のボール紙のなかが、はっきりと見えるのである。(Ⅱ. 923)

この後、彼女は従兄から借りてもいない借金をしているという暗示をかけられて、よく朝、従兄のホテルを訪ねて金を返そうとする。この事実に主人公は愕然とするのだが、それはこの世には目に見えない力(催眠術)が存在している、つまりはオルラもまた存在していて、外部の意思が人間の精神を支配しようという考えに主人公が傾きかけたためである。だが、このエピソードの衝撃はそれだけではない。ここで主人公がその存在の根底を揺すぶられるような驚愕を受けたのは、M. ミル

ネールによれば、「人間とそのイメージの関係であり、そして人間がそこに自分から独立した自立した主体を認めうるかどうかの可能性<sup>22)</sup>」である。つまり主人公はそこに映るはずのない名刺のなかに自分の姿を認め、しかもそこに映し出されていた写真には自分の姿が映っていたということなのである。ここには自己像の二重化現象が認められる。いわゆる「分身」の問題がここでは問われているのだが、人間はどこまでもう一人の自分という存在（そこには自己の不在が前提とされているだろう）、あるいはここにあるような分身の増殖に耐えられるのであろうか？

次のエピソードでは、ちょうど逆に、鏡における自己像の消失が起こっている。それが最後の場面に当たる、重要な二つ目のエピソードである。

私は両手をひろげながら立ちあがると、倒れるくらい急激にふり返った。おや！はてな？……真っ昼間のように明るいのに、私の姿は鏡に映っていない！……鏡はからっぽで、澄みきって、奥深くて、光にみちている！私の姿は、そのなかにな……しかも、私は、そのまん前にいるのに！私は、その澄みきった大きなガラス板を、上から下まで見ていた。錯乱した眼でそれをながめていた。そして、これ以上前に進む気にはなれなかった。身動きひとつしようともしなかった。あいつがそこにいることはよくわかっていたが、うっかりすると、取逃がすだろうと思ったからだ。なにしろ、眼に見えぬ肉体で、私の映像を吸い取ってしまった (*dévoré*) ほどのあいつなんだから。(II. pp.935-936)

この場面が意味するところは二重である。まず、鏡と主人公とのあいだに身をおいたために、その眼に見えない姿をオルラが露呈してしまったということ。つまり、オルラの存在が障害物となって、主人公の姿が鏡に映らなかったというものである。だがまたこの引用からは、もう一つ別の、さらに重大な意味を読み取ることができる。主人公の姿が鏡に映らなかったのは、そこにオルラがいてさえぎられたためだけではなく、主人公の映像、すなわち「自己[同一性] *identité*」がオルラによって奪われてしまったからであるとするものである。しかも、ミルネールが指摘するように、オルラは「『非自己 *la non-identité*』[非同一性]」であり、同時に存在もしていれば不在でもあり、内にもいれば外にもいる、存在の外にあるもの (*hors-là*)<sup>23)</sup>」であり、主人公はこうした矛盾かつ完璧な怪物に取り付かれ、「自己同一性」を吸い取られて (*dévoré*) しまったのである。こうした恐怖に取り付かれたなら、この直後、主人公が錯乱状態に陥って、家に火をつけるという暴挙に出るのも無理はないだろう。(※)

「分身」といい、「自己同一性」の欠如といい、いずれも人間存在の根源をなすところのものを主人公はオルラによって脅かされている。そしてそれらの危機は、作品上の要所要所にうまく配置され、テキストを動かすモーターとしての役割を果たしている。「オルラ」という作品が、真の幻想小説として読者の心を打ってやまないのは、モーパッサンがそうしたテーマ上の核心的なところを確

(※)ここで主人公の「*aliénation* 精神病=自己喪失」は、その極みに達している。

実に捉え、それを見事な構成配置において示しているからではないだろうか。

#### Ⅳ. むすびにかえて——作家モーパッサン、科学信仰あるいは理論への抵抗者

新版「オルラ」を執筆した同じ年の1887年、モーパッサンは、『ジル・ブラス』誌に「海水浴場にて」と題した時評を発表して、そのなかで催眠術に触れている。そこにはこうある。

催眠術は一つの宗教となりつつあり、その奇跡、伝道者、熱狂的支持者、そしてそれを信じない人々を獲得しているが、通常の諸宗教とは以下の点で異なっている。催眠術を施すそのほとんどの司教は、医学博士であり、神学博士ではない。(……)しかしながら、理性的な科学者の行う実験のなかには、否定しようのない実験がいくつかあって、それらは奇妙ではあるが強力な興味を提示するものがある。催眠術師たちがあらかじめ眠らせておいた被験者たちに何らかの想像上の存在や対象の幻覚を暗示することができることはよく知られている。それに関してはまったく驚くべきものは何もない。

術師たちはこう言う「ここに猫が、犬が、狼が、コップが、時計があります。」すると催眠術をかけられたものは猫を、犬を、狼を、コップを、あるいは時計を眼にするのである。

私は眼にすると言ったのであって、彼らが眼にしていると信じ込んでいると言ったのではない、というのも、幻覚の瞬間の眼球のプリズム検査によると、網膜上に、存在していない、暗示された対象の像が映されているのがわかるからだそうである。この事実は、ごく真面目な医学書のなかで断言されている。そしてこの事実は、人生においてはすべて幻想であるというあの理論を保証するものである。こうした奇妙な観察の哲学的結論は無数にあって、まったく理解に苦しむところである。<sup>24)</sup>

小説「オルラ」において催眠術を物語の重要なファクターとして使っておきながら、催眠術に対するモーパッサンの懐疑的態度は、ここにおいてもまだその批判の矛先の鋭さを緩めていない。ここに読まれるのは、モーパッサンの科学信仰批判、理論偏重批判である。モーパッサンにとっては、催眠術は医学によって認知されはしても、しよせんそれはもう一つの宗教、科学という衣をかぶった迷信にしかすぎないようである。上で見たように、そもそもモーパッサンの作品は、医学をも含めた科学のなんらかの説や理論を出発点として作られるものではない。彼の小説は、外部から押し付けられる制約を嫌うのであり、むしろ内部において形成される独特の論理と衝動に突き動かされて進んでいく。確かに、モーパッサンの幻想小説にあらわれる恐怖、不安、妄想と精神医学で扱うそうした対象との共通点は多いであろうし、またサルペトリエールのシャルコーの講義も熱心に聴いている。しかしながら、そうした知的興味のあらわれと作品創作とはまったく別物である。P. バイヤールが言うように<sup>25)</sup>、われわれは現代の精神医学やフロイト流の精神分析に慣れすぎて、そうした現代的観点でモーパッサンの幻想作品やその生涯を見すぎるきらいがありすぎはしないだろ

うか。しかし、事実は逆なのである。モーパッサンは彼自身の目で当時の社会を見、自らの精神疾患を観察し、それを糧にして見事な作品に仕立て上げていった。一方では、医学者や科学者は自らの観察やデータをもとに自らの学説の理論を構築していくであろう。同じ対象を扱いながら、その営みはまったく異なっている。冒頭、モーパッサンとフロイトの架空の出会いの例をひきあいにしたが、確かに、相似た両者が偶然から、あるとき、交錯をすることがあるかもしれない。しかしそれはあくまで偶然であり、あまりそれを杓子定規に取りすぎるのはいかなものであろうか。断っておくが、文学と医学がまったく無縁のジャンルであるといいたいわけではない。時には両者を比較検討することで、大きな成果が得られることもあるであろう。避けるべきは、どちらか一方を絶対的な基準とし、他方をそれに従属させてしまう愚である。だからここでわれわれがとりあえずすべきなのは、固定化した理論にとらわれないモーパッサンの諸作品を丁寧に読み込んでいくことではないだろうか。

## 註

- 1) 例えば、フランスにおける精神分析の歴史の変遷を丹念にたどった記念碑的著作である Elisabeth ROUDINESCO, *Histoire de la psychanalyse de France*, 2 vols, Fayard, 1994 や、モーパッサンとフロイトの比較論を著した Pierre BAYARD, *Maupassant, juste avant Freud*, Editions de Minuit, 1994 にそういった記述が見られる。
- 2) メスメルの業績と生涯については、以下の書物に詳しい。ロバート・ダートン『パリのメスマー/大革命と動物磁気催眠術』稻生永訳、平凡社、1987、ヴィンセント・ブラネリ『ウィーンからきた魔術師』井村宏司・中村薫子訳、春秋社、1992、ジャン・チュイエリ『眠りの魔術師メスマー』高橋純・高橋百代訳、工作舎、1992。そして、精神医学の立場から書かれた文献では、H・F・エレンベルガー『無意識の発見』木村敏・中井久夫監訳、弘文堂、1980、シェルトク／ソシュール『精神分析学の誕生——メスメルからフロイトへ』長井真理訳、岩波書店、1987があり、メスメリズムの文学への影響を扱った古典としてマリア・タートル『魔の眼に魅かれて——メスメリズムと文学の研究』鈴木晶訳、国書刊行会、1994がある。また、19世紀のフランス文学作品において表象されたメスメリズムの変遷については、拙論、「19世紀フランス文学のなかに現れるメスメリズムの人物の変遷——バルザック、ゲーティエ、フローベール、モーパッサンを例にとりて」、『医療社会の思想と行動Ⅱ』、弘前大学人文学部医療化社会研究会、平成15年、pp.57-81を参照されたい。
- 3) 以上の精神医学史については、エドワード・ショーター『精神医学の歴史』木村定訳、青土社、1999 および、クリフォード・アレン『異常心理の発見』小林司訳、ちくま学芸文庫。前者は、主に18世紀から現代に至る精神医学の歴史を網羅的に記述しようとする野心的な研究書である。ただし、シャルコーに対しては非常に冷淡な態度を示しており、ほんの2-3ページ程度の言及しかない。同様にフロイトをはじめとする分析派に対しては批判的な態度を貫いている。後者は、1952年出版といささか古い文献で現代の薬物治療中心の精神医学をカバーできていない欠点があるが、素人にもわかりやすい心理学入門のマニュアルとなるように書かれたもので、分析派に対して非常に好意的な記述が目立つ。二つはまさに対照的な名著である。また、文学研究の立場からは、吉田城『神経症者のいる文学——バルザックからブルーストまで』名古屋大学出版会、1996の「序論」において詳しく論じられている。吉田氏はこの著書において、卓抜なモーパッサンの幻想小説論を展開しており、本論のテーマとも重なるところが多々あり、大いに参考にさせていただいた。
- 4) Etienne TRILLAT, *Histoire de l'Hystérie*, Edition Frison-Roche [nouv. éd], 2006. [エティエンヌ・トリヤ『ヒステリーの歴史』安田一郎・横倉れい訳、青土社、1998、p.160]。
- 5) *Ibid.*, p.105. [同書、p.167]。
- 6) *Ibid.*, p.110. [同書、p.174]。
- 7) *Ibid.*, p.110. [同書、pp.174] およびエレンベルガー、前掲書、p.104を参照のこと。

- 8) エレンベルガー、前掲書、p.105。
- 9) Cité in Nadine SATIAT, *Maupassant*, Flammarion, 2003, p.273。吉田城氏もまた、前掲書において、この時評について言及している。
- 10) Maupassant, *Contes et nouvelles I*, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Gallimard, 1974 を典拠としている。本稿では、モーパッサンの作品については、同叢書を使用し、引用箇所には、末尾に、巻数とページを記すにとどめた。なお、この引用箇所に出てくるドナートとは、編者 Louis FORESTIER によれば、本名 Alfred Dhont、通称 Donato といい、ベルギー人の磁気療法士であり、1882年から1884年にかけてパリ市民の前で見世物まがいの催眠術公演を行った人物とされる。FORESTIER が同註解において書いていることによれば、この人物は金髪でテレパシー能力を備えた女性アシスタントとの不倫を妻に詰問され、彼は世間の笑いものとなり、それによって彼の行っていた催眠公演は格好の大衆演劇の題材になったということである (I, p.1420)。こうした例から察してみても、当時、厳密な科学的方法であろうとしていたシャルコーの催眠と民衆の見世物となっていた催眠のイメージの落差は大きく、と同時にそれらを同一のものとして捕らえがちであった民衆の心理がうかがえて興味深い。
- ちなみに SATIAT によれば、この「動物磁気」という物語がモーパッサンのテキストでシャルコーの名前がはじめて言及されているものであるという (*Op. cit.*, p.273)。
- 11) 動物磁気と視覚との関連性については、拙論、前掲論文を参照されたい。動物磁気の治療や施術においては、見つめるという視線以外にも、病気部位に接手をほどこす触覚的な方法、あるいは他の器具を使用するなど、さまざまな方法が存在するが、とりわけ19世紀の作家たちは、視覚による動物磁気の施術にこだわり描写している観がある。
- 12) モーパッサンの最初に発表された「オルラ」は、1886年発表 (Maupassant, *Contes et Nouvelles II*, 《Bibliothèque de la Pléiade》 Gallimard, 1979, pp.822-830)、日本語では、『フランス幻想小説傑作集』窪田般彌・滝田文彦編、白水Uブックス、に収められたものを読むことができる。それに対して、2番目の「オルラ」は翌年の1887年に執筆され (Maupassant, *ibid.*, pp.913-938)、これもまた『モーパッサン短編集Ⅲ』青柳瑞穂訳、新潮文庫、で手軽に入手可能である。
- 13) 寺田光徳『梅毒の文学史』、平凡社、1999。
- 14) 同書、p.185。ちなみに梅毒の症状は、三期に大別されるとこののだが、これについては、寺田、同書、pp.14-15に詳しい記述があるのでそれを参照されたい。
- 15) Armand LANOUX, *Maupassant, le bel ami*, Fayard, 1967 [アルマン・ラヌー『モーパッサンの生涯』河盛好蔵・大島利治訳、新潮社、1973、p.286]によると、モーパッサンの英訳者ハリスという人物へ語った、作者自身のしごく冷静なかつ客観的な以下のような証言が記されている。「ところでハリスの語るところによると、モーパッサンは『オルラ』に添えて彼のもとへ「たいへん、興味のある」手紙を書き送り、「そのなかで批評家たちは、彼が気がちがったと思ひこむだろうが、友人のハリス氏ならだまされることはあるまい」という意味のことを述べているそうである。《ぼくの精神はまったく健全です。しかし、この物語は不思議にもぼくの心をとらえました！われわれの脳のなかには、説明できないようなさまざまな考えや、いってみればわれわれの存在の背景をなすたくさんの本能的恐怖が生ずるものなのです》」
- 16) この二つの「オルラ」の扱いについては、その見解について、研究者の間でも意見がさまざまである。つまり、初稿「オルラ1886」は習作に過ぎず、これに飽き足らなかったモーパッサンは、改稿の意味も込めて「オルラ1887」に着手したものであるとか (プレイヤッド版の編纂者であるフォレストイエ、そして Joël MALRIEU, 《Le Horla》 de Guy de Maupassant, Gallimard, 1996)、あるいは、そもそも二つのテキストは題材モチーフは同じであれ別の意図の元に書かれた別作品であるといったものである。本稿では、この二つの作品の細部には立ち入らず、本論の目的である「催眠術」に関する項目にだけ触れるにとどめたいと思う。
- 17) Roger BOZETTO, *Le Fantastique dans tous ses états*, Publications de l' Université de Provence, 2001。
- 18) R. BOZETTO, *ibid.*, p.155。
- 19) モーパッサンのこうした論拠には、当時の科学や思想が遭遇していた大きな展開期と危機がその背景にある。ハーバート・スペンサーの『第一原理』(1862)の読者であったモーパッサンは、人間の認識能力の限界やわれわれの感覚の間違いやすさに関心を抱いており、そのことをいたるところで書いている。また、実証

主義科学の発達により、人々はそれまで想像することさえできなかった未知の生物がこの世に数多く存在することを知ることになる。特にダーウィンの進化論が発表されたのもこの少し以前であり、それにより世界は今までとはその様相を変え、また人間はもはや世界の中心的存在ではなくなり、ましてや進化の最終的存在であるかどうか疑問視され、生物学界だけでなく神学界をも巻き込んだ大いなる議論へと発展していった。また、思想界においてもショーペンハウアーの厭世哲学が世紀末社会を席卷していて、元来、ペシミスト的性格の持ち主であるモーパッサンがそれに敏感に反応したのは、想像に難くない。われわれの今回のテーマである「催眠術、動物磁気」も当時の流行をみた科学の一環として、同様に問題視されるべきであろう。以上の問題については、プレイヤッド版に付されたフォレストイエの解説（II. p.1612-1623）、R. BOZETTO, *op. cit.*、そして J. MALRIEU の著作に採録されている G. PONNAU, *La Folie dans la littérature fantastique*, CNRS, 1987（J. MALRIEU, *op.cit.*, pp.157-161）を参照した。

20) R. BOZETTO, *op. cit.*, p.158

21) 拙論、前掲論文

22) Max MILNER, *La Fantasmagorie*, PUF, 1982, p.112 [マックス・ミルネール『ファンタスマゴリア』川口 顕弘・篠田知和基・森永徹訳、ありな書房、1994、p.118。一部訳文を変えてある]

23) *Ibid.*, p.109 [同書、p.113]

24) Cité in J. MALRIEU, *op. cit.*, pp.161-162.

25) P. BAYARD, *op. cit.*, p.